

關西諸方言のアクセント

——一・二音節語に就いて——

藤原 與一

序 言

- 一 單音節語のアクセント
- 二ノ一 二音節名詞のアクセント
- 二ノ二 二音節動詞のアクセント
- 二ノ三 二音節代名詞のアクセント
- 二ノ四 二音節副詞のアクセント
- 三 二大對立の分布と型式
- 四 現代國語アクセントの共時面
- 五 後 語

近來、方言アクセントの研究は頓に盛大になつたが、こゝには色々の困難な問題があるやうである。その中、特に考へさせられるのは、

一、型式と分布とは、絶えず相關的に之を眺めねばならない(假令一地に就いても)。

型式の解釋にも、必ず分布論が參酌せられるべきである。

狭い範圍内の諸地區間で型式又はアクセント體系の新舊・移動を立言せんとすることは、無理を伴ふ。此には成

るべく廣い地域の分布を調査して、その視野の中で、問題の諸地區を考へると言ふ方法が採られるべきである。この際、型式に對しては、形としての型式そのものの現はれ方を、遊離させて考へることなく、常に中味のある、即ち特定の語の上に生かされたアクセント型式として、個性的に之を見詰めることが必要である。さうして常に、地方アクセント體系の特質が那邊にあり、個々の問題はそれにどう關聯するかを注目することが、必要である。

一、妥當と信じられる一定の規準(提示語)を適用した、一定の地域での比較研究が必要である。これは先づ一語一語によつて、精しく觀察されるべきである。かくして型式と分布の法則性が捉へられねばならない。

地方毎に別個の自由な觀察をなして然る後に比較考察せんとするには、綿密な用意に基づく委しい調査と、整理上の周到な注意とを必要とする。

と言ふ様な諸點であらう。次下には、近畿・中國・四國・九州東半(三縣)に就いて、その各地方各縣の女師在寮生の夫々大部分の方より聴取し得た結果に基づき、私の報告をしてみたいと思ふ。

調査語の選定、被調査者に關する諸事項、調査實施に方つての環境と條件、調査成績の客觀的な検討等に就いては、複雑多岐に亘るので、今は一切省略することにする。

註 昭和九年四月より 同十一年四月に亘る。

調査語

第一項 東京語の「○」の語例 …… 粉―茶―酢―火―木―齒
第二項 東京語の「○」の語例 …… 菜―名―日―氣―子―巢

最初に断つておかなくてはならないのは各項の題名に「東京語の…」としたことである。一體東京語に於いて「○」型式を示す諸語が、地方アクセント分布に於いても共に同一傾向をとり勝ちであるか否かは凡そ豫断を許さない。加ふるにこの調査は中央語の状態に照らして地方語を觀んとする一方的なものではなく、中央との比較を重視しつゝも更に地方それ自體としてのあるがまゝを闡明することに努力を却けんとするものである。随つてこゝに項目の名義として東京語の型式を採用することは何等か不合理と見えることを免れないであらう。併し今日私製の國語方言アクセント地圖の示す所を觀察して型式なりその分布なりの異同の上から之等进行分类した結果は、略々東京語アクセント型式の類別と相應するものが多いことゝなつたのである。その根據は、本調査地方の複雑なアクセント分布よりして歸約される所の國語アクセントの二大系統對立の一方が實は東京語アクセント式のものであつたことであらう。この故に項目名としては、右掲の如く(又以降に於いても)一先づ東京語アクセントの型式種別を假ることにしたのであつて、強ち便宜主義によつたものではないのである。

扱て、單音節語アクセントの調査に就いてあるが、これは二音節以上の語とはかなり別趣に屬するので調査上特別の工夫を要するところが多い。二音節以上の語のアクセントが、その語自體内の音節系列上に於ける音高低度の相對觀によつて決定されてゐることからすれば、寧ろ「血」とか「田」とかを單獨に發音せしめてそのアクセントの絶對度を二音節以上に於ける高低觀に徴して把握すると言ふ方法がよいかも知れない。然しこれが遂行はかなり困難であり、殊に比較を主とする調査のために採らるべき方法としては實際上適當でない。「血」「田」等に助詞を加へ「血が」「田は」等の如くにして以て一應二音節以上の語のアクセント決定法に比肩せしめようとすることも亦考へられるが、これとても理論的に言つて、單音節語アクセントを最も正しく生かす最上の方法とも看做し難い。即ち「血が」「田は」のまゝではあまりにも中間的な表現であつて、これだけに二音節名

詞と同程度の語の獨立性を期待することは困難であり、隨つてこのまゝでは「血」「田」の一番節語アクセントの内質或は全面的性質がさながらに發揮されてゐるとは直ちに豫定すべきでない。私の調査に於いては試案として「一番節名詞十助詞十用言」の如き形を整へて之によつて所期のアクセントを索めようとしたのである。各語例は左の如く綴られた。

粉に成る。菜を漬ける。酢を買ふ。火に燒ける。木が腐る。齒が悪い。

葉が悪い。名を附ける。日に燒ける。氣が腐る。子が出る。糞を作る。

勿論この方法とても完全ではなからう。かゝる長い形態の全體が「アクセント成態を呈出せんとする所から自然單音節名詞は次の用言に引附けられ勝ちになる所もあると思ふ。然し私の經驗からすれば、この手段は酬いられる所が多い。

(先づ一々の語例に就いて、その型式分布を精細に記述すべきであるが、やむなく省略に従ふ)

一音節名詞アクセントは高又は低の何れかの型式を示す。然し本調査地方に於けるこれが分布は單純でなく、一語例内に於いて常に兩種型式の種々なる分布關係を呈することが主調となつてゐるのである。これらは大體北(中國)西(九州東半)と南(四國)東(近畿)との兩地方に分たれ、この間に常に相反する型式對立を見るのを普通とする。

註 中國に關聯して但馬及び丹後北半は恒常的に中國の一般と同調を示す所であるから、これらの接縁地は中國なる名辭に包括せしめることとし、但馬及び丹後北半が近畿アクセントと接する所の境域の若干の變動に就いては別に考へることとする。

而してかゝる一般の状態の下にあつて、地方的に特殊の状態を示す箇所が尠くない。各分布圖はこの特殊状態の現れ方如何によつて夫々独自の分布様相を示すことになり、隨つて型式上の種別多少も生じて来る。この點に深く留意すれば各圖は全く別個のものであり、簡單に概括し難いものとなつて来る。然し更に高所より觀察すれば、これら特殊

の變化は時々一定の線(地帯)上に於いて、各語例毎に、生滅してゐることが分る。このことは次の二つの事實を導き出す。即ち一つには以上の十二例によつて知られる特殊現象の起つたすべての地域は、悉く重要なものであり、これらに或る力強い底流的勢力の局所表現の例に過ぎないのではなからうかと言ふことである。二つにはこれらの地域を除くればあとは比較的一定の傾向を示し易いと言ふことである。變化地帯が如何に見出されるかは後に全體の分布図から歸納されるべきであるが、隠岐及び北陰地方、九州の筑前筑後日向、四國の西南部、近畿南方が先づ第一の重要特殊地域であることは肯定し易い。之に次いで但馬、丹後北半、四國東北部、周防等がある。近畿地方の東北境に起り勝ちの特殊變化は、近畿とは性質を異にする中部地方のアクセントとの關係に基くものと見てよいであらう。

以上を以てすれば本調査地方の外郎地方こそ特に留意すべき地帯であることが想察されるのである。型式對立と言ふ一般状態の下にあつて生じ得た一切の例外的現象は、大凡かゝる地帯に存在する。十二例の結果からすれば、この上更に多くの調査を試みれば試みるほど、外郎地帯の特殊性は益々明瞭になつてくることと思はれるのである。然し今の場合には本調査地方周辺の處々に特殊現象を認め得たと言ふに過ぎない。而してその最も恒常的に現れた所に對し、此處に一定の特殊地域としての地位を與へんとするものである。北西地方にあつては隠岐・出雲を中心とする北陰一帯、次に筑前筑後日向の各一部分或は大部分、南東の地方に於いては四國西南隅南近畿の、十津川方面或は更にそれ以南にも及ぶ地方の各々が其れに該當する。九州は東半の福岡・大分・宮崎の三縣下を調査し得たのに過ぎないため、今こゝに他資料等を參看して九州の全貌を云々することは控へ、所與の結果に基いてその範圍内での大勢を判

斷ずることにした。これは私の元來の九州に對する觀點の然らしめる所であつて、今の場合は中國四國との關係に於いて九州を觀ることが必要だつたのである。かくて分布圖全部の傾向を輯合して考へるのに、九州東半は一般としては中國と同調であると看做しておくのがよいやうである。故に右には、反中國的なものを以て特殊と解したのである。扱てこれを後に九州全般に擴げて觀察した時、九州の一般の傾向上、右の中國的反中國の兩色彩等が如何なる地位に立つかは自ら別問題である。要するにこゝでは中四國との關係から言つてかゝる一般相とそれに對する異相との差別が觀られ、この範圍内ではかゝる對應關係になつて居ると言ふことを述べれば足る。九州全般を論ずる基礎としての發展性も亦自ら此處に與へられてゐるのである。

特殊變化の地帯が認められると言ふことは、變化の内容如何を問はず重要な事實であるが、更にその特殊地域の型式種別に著目することにより、愈々その重要性を確認し得るのである。元來型式は大體高か低かの二種であるから、所謂特殊地域は、既に述べた如く自己の周邊とは正反對の型式をとり、隨つて北西の特殊地域は南東一般と、南東の特殊地域は北西一般と夫々その型式を同じうするのが常なのである。かくの如く中間に廣く反對の型式を存して互に遠く相一致するものがあると言ふことは、一見極端な現象と言はざるを得ない。然しこの各々當方と同じものが先方の中にも介在してゐると言ふ相互的な差合ひの分布は、同時にこの問題を解くべき方法を暗示してゐるものであり、換言すれば本調査地方のアクセント分布の成立過程を平面的に示してをるものと言へる。この見地から、特殊地域以外と雖も、各地に現はれんとする例外的な現象を洩らすことなく採り上げる必要があるのである。特殊地域の、かく

なつた必然性は、この種の極めて特別な飛び／＼の分布を幾つも據點に得ることによつてはじめて明白にされるものであらう。特殊地域の型式上より見た重大性は、更にこの單音節語を五音節の形として調査したその全體の相について觀る時に一層明かにされる。第一項に於いては「○○○○○」、第二項に於いては「○○○○○」の形が特殊地域に存したのである。(存して居るが故に特殊地域であつたのである)。かうした、アクセント複合の生起し得る場合の廣汎な語形にあつて、尙且、單音節語に續く用言にアクセント隆起を生ずることなく、二音節語の根本特徴に等しい型式對立をそれらの内に示し得たことは、特殊地域こそかへつてそれと同傾向の南東又は北西よりも重要な型式を存してゐると言つてよいものであつて、アクセント分布系統論に寄與することも絶大なのである。

特殊地域を除き、再び一般の状態に就いて見れば、中國九州地方に於いては比較的劃一的であり、而も語例による分布の異動がさして多くない。(但し九州は中國よりは一段複雑してゐるやうである)。然るに四國近畿兩地方は此と正反對である。それも第二項^{註一}及び第二項の各分布傾向の中、何れかと言へば第二項即ち東京語では低型であるものゝ方がより複雑な結果を生じてゐるのである。^{註二}六枚の地圖が前後三枚に分割すべき傾向を示したのは既にその證であり、後の三枚に於いて近畿北半、四國の西南部から約北半へかけての地域に夫々見える新らしい變化は更に^{註三}それを證するものである。

註一 第一項に屬する六枚の分布圖を通觀するに、分布様式の二々の細部に互つては夫々異同があり、全然同一と思はれるものは絶無で、第六圖齒の如きは、甚だしい例外となつてゐる。然し之を大所より觀れば、以上の分布

圖は甚だ一致性に富む明瞭な現れ方をしてゐると言つてよい。調査の實際に方つて耳にすることが出来た右以外の語についてもさして例外を認め得なかつたのであるが、恐らくは右の諸例を以て同種語例の全般を推測しても、殆んど誤はないであらう。このことは他の音節語の傾向と相關聯させても言へることである。

註二 第二項に屬する六例は、前後三例宛一團をなし、兩者は分布の性質を異にする。前三例にあつては南東地方は比較的單一な分布を示し、大和南方の十津川の如きも特殊な地位に立つてはゐない。而も後の三例に至つては南大和より南紀に互り、近畿一般とは寧ろ著しく相反した傾向を隠見させてゐるのである。これらは十津川附近の性質を考察する上に有力な資料となるであらう。前三例にあつても近江の東境は近畿一般に反する傾向を示すことがある。東隣美濃との關係によるものと解される。

後の三圖にあつては、北西地方の特殊現象が多様な姿をとつて現はれるが、それよりも南東地方の重要な變化によつて、前三例とは別の状態を呈することとなる。四國西南部のみが北西地方と同傾向を示す地域とは決め難く、四國北半殊に伊豫は四國西南部にづいてそれと同傾向をとることもあることを示すのもこれらであり、四國東部と近畿南部との脈絡を想見せしめるのもこれらである。さうして後の點については、これらも亦近畿一般とは正反對の傾向によつて繋がれようとしてゐるのである。更に近畿北半方面に於いては、北西地方と同じ傾向が現はれてゐるのが注意される。

かゝる傾向は、二音節語の上昇型に於ける場合に正に相應してゐる。兎もあれ高型、低型によつてその分布傾向の上

に差別性が認められるのは、注意すべき點であらう。以上を要するに中國九州と四國近畿とは

○↑↓○ ○↑↓○

の二種の對比に於いて一般に相反立し、一方北西側は東京語と同一傾向に在ると言へるのである。

單音節語アクセントとしては、型式上より見る時、大體「○」又は「○」の何れかを出でないことが分布圖によつて知られる。然し「名詞＋助詞＋用言」と言ふ調査語組成の關係上、「低」又は「高」の現れ方が必ずしも一樣でないのである。如何なる場合を如何に解して「高」又は「低」とするかは周密な識別を要する。一體、北西と南東とを比較した際に、右の語形に於けるアクセント成態の緊密性は、一見南東の方が大であるかにさへ思へるのである。

随つて單音節アクセントとして抽出せんとする際、北西では容易に之を爲すことが出来ても、南東地方のものに關しては、より多く困難を覚える。第二項の語例に於いて一層それが甚しい。この際はじめて南東地方に現はれるのが「氣ガクサル」「子ガデキル」「氣ガクサル」「巢オツクル」等の、冒頭より二音節以上連続して高いもの乃至全高となる型式である。分布圖製作に方つては、これらすべてを單音節語の高型に編入したのであるが、然し「巢オツクル」等の「○●……」型式とは、必ずしも嚴密な意味に於ける同質でない。即ち「○○○○……」以下の諸型式に於いては、五音節上に賦與せられたアクセントが既に一箇の成態として渾化し、理論的には、單音節語自體のアクセントの個性は全體性の中に著しく吸收せられてゐると見るべきであるからである。この點から推して單音節語と助詞或はそ

れ以下とが共に高音を示すのは、恐らくより新しい成立に係るアクセント成態であると思ふ。これに關しては、次の二音節語の場合にもつと明瞭な問題として述べねばならない。要するに助詞との關係に於いて眺められる「○●」の「○」は、單純な高音節語に比しては、本質的に何程か差異があると云ひたいのである。第二項の高音アクセントの語例に於いても、「○○○○○」「○○○○○」「○○○○○」等は、最初から二音節又はそれ以上低音節がつゞくものであり、言葉調子としての成態が著しく、隨つて簡單に、これらに含まれる單音節語は「○」であると斷ずるわけにはゆかないのであるが、前述の場合に比すれば、幾らか容易に低型と認め得るやうである。

アクセント型式と密接に關係してゐる現象に南東地方の長呼がある。第一項に於いては「低」のものが長呼されても「○○」となつて「○○」の如くに曲節を生ずることはなかつたが、第二項の例中では「高」のものの長呼の際に「○○」となり、趣を異にしてゐる。五音節全體として、上昇傾向の時は容易に高くなり難いものが、下降の際には比較的急激に降下することにも依るものであらう。「○○」となることのある境域は、「齒」の例の「ハ」の分布によつて覗ひ得る。さうしてこの現象は北西地方はもとより東京語にも見られぬ所であり、主として近畿、それに次いで四國の特質として認められるのである。

九州に於いては、格助詞及び動詞の語態が他の地方とは著しく異なる場合があり、九州内部に於いても地方によつて相違がある。かくの如き形態上の異同は、一面から言へば語句の音韻的構造の上の相違であるから、アクセント成態の上にも亦全然關係なしとするわけにはゆかない。アクセント型式論の上からは一應區別すべき問題であらう。

最後に附言すべきは、以上十二枚の図は單音節語アクセントの分布圖として作製されたものではあるが、同時に、兼ねて言葉調子の資料としても役立つ點が少くないことである。これは一に單音節語アクセントの調査の爲に五音節と言ふ長形を用ゐたことによつて享受された效果に外ならない。

二の二 一音節名詞のアクセント

- 第一項 東京語の「○○」の語例……………雨―蜘蛛―肩―箸―朝―牡蠣
- 第二項 東京語の「○○」の語例……………型―花―橋―雲註(6)―麻
- 第三項 東京語の「下中」の語例……………柿―鼻―鉛

註「雲」は東京語では「○○」型式のアクセントに屬するが、北西の一般の傾向としては「○○」である。隨つて結果論的に言つて、寧ろ東京語の「○○」の語例中に含めておく方が、當調査地方の分布比較上では、一層便利なのである。

第一項東京語の「○○」型式の語、六例を通觀するに、單音節高型の語例と甚しく相似た傾向に富み、而も二音節語であるだけに、何れかと言へば前者よりも一層精細な分布關係を示し、一音節語の一般傾向を更に確認せしめる様な状態をなしてゐる。前に特殊地域として先に認められたものゝ如きも、二音節語に於いては恒等的にその特質を發揮したのである。且つ上の諸例を綜合すれば、特殊地域の性質に關する考察に尠からざる便宜を與へられたことを知る。就中隱岐に於いて、北陰地方に「○○」の盛んである場合に、同じく「○○」を有し、而もその中、島後の西半に

あつては「○○」を存してゐたのが、北陰地方の「○○」が消滅せんとすると同時に、遂に隠岐も島前の「○○」を全部没し、牡蠣の圖に至つては北陰と共に隠岐全部が中國一般の「○○」になり切つて了ふ。この経緯は、北陰地方と隠岐との聯關性を暗示するものとして重要視すべき過程に數へられる。單に北陰のみに就いても、出雲地方の特殊傾向はたゞに出雲に止らず、西は石見東隅の安濃郡に、東は西部伯耆地方にまで現はれんとするものであることが知られる。さうして、夜見ヶ濱の突起は、出雲と伯耆との兩性質の輯合する所と見られる。九州の特殊地域も、出雲地方に平行して變化を起し、「○○」を示して北西一般に通ずる様にも見受けられるが、然しその傾向に強い一定性は認め難い。それだけ北陰とは事情を異にするのであらう。四國西南部は絶えずその特殊性を示すが、時に其處以外にもそれと同型式のものゝ存するのは、西南部の性質解明の手掛りとして見逃せないのである。

型式上より見るならば、北西が東京語と同じく「○○」であるのに對し、南東地方に於いては「○○」を以て逆反の對立を示すのを基調としてゐるが、更にその間に「○○」「○○」「○○」の特殊型式を發生せしめてゐる。この内延音化の傾向は、四國にあつては、讃岐にのみ而も一定にあらはれ、近畿に於いてその分布が必ずしも一定でないのとは趣を異にしてゐて、前來の四國東北部即ち主として讃岐の特殊性を一層高めてゐる。近畿と四國とのかゝる分布方式の差異は、同時に又讃岐アクセントの特殊の成立過程を窺ふ有力な一方途となるであらう。凡そ東京語には見られぬ地方特有の型式は、當該地方アクセント分布性の究明上、裨益する所が尠くない。例へば「○○」(例、朝アサー)の延音化の如きも、これが南東地方に生起することが多いのにも拘らず南東と同傾向の、北西地方に於け

る特殊地域には、多く之を見ず、且つその近畿の分布變動に比べて四國には讃岐に規則的に出現すると言ふ一團の事實は、恐らく右の型式が第二次的の發生に係るものであることを意味するものであり、随つて又、右の北西特殊地域は、南東の有する根本的性質を遅くとも南東とは同様の古い時代から既に有してゐたことを、或は推定せしめるのである。

第二項東京語の「○○」型式の語例の内、「型」「花」「橋」「雲」の四例は

北西○○↑↓○○南東

の最も鮮明な對立分布を示してゐる。さうしてこれらは、北陰地方に反對型式を示す特殊地域の現はれなかつたことを不問に附せば、下降型の語例の分布一般に酷似した様式を示してゐる。單音節語の場合には、低型の語例の中、かくまでよく高型の一般傾向と合致するもの（北陰は除外）は見出し得なかつたのである。

註 最初の三圖に於いては、隱岐のみが山陰地方に特立して反對型式を示してゐる。たゞ最後の「雲」の例は、北陰にも之を存してゐる點で稍々異なる。さうして、たゞに北陰に南東と共通の「クモ」を存すると言つても、分布の仕方が今までの何れとも大いに相違してゐるのである。即ち石見の東部三郡、及び出雲は措いて西伯地方、それに東伯の西部に散見せられるのである。これらと隱岐の「クモ」とを結び合せるとき、隱岐及び北陰の特殊性を解明すべき新たな手順を得たことになる。

最後の「麻」の二例はかなり別趣に屬する。之を一方から觀れば寧ろ東京語の下中型の語例にも準じられるべき分布を有してゐるのである。

今特に詳述すれば、先づ四國及び近畿の大部分には北西本位の型式と認められた「〇〇」が分布してをり、宛も東京語「下中」の語例「柿」↓、「鼻」↓、「館」の各圖に漸進的な傾向を更に一段と推進めたかの觀を呈してゐる。然し反面に於いて北西地方の内部には、今までの圖に例のない異變をも生じてゐるのである。即ち備中・備前・美作・石見邑智郡の南部（これだけは隔絶してゐる）。出雲東端の能義郡・伯耆・因幡・但馬・西北播磨・丹後北部（間において丹波北部の何鹿郡にも）に「アサ」の分布することがそれである。從來の圖にあつては南東に存して、北西との對立を示した所のかゝる「〇〇」型式が、右に述べた如き分布をとすることは、全く目新しいことであり、且つ私製の全分布圖中類例の無いものであるが、これが根底ある重要な分布様式であることは、他の方言事象の分布に徴して明瞭である。（私の別に調製した語法、音韻變化、單語に關する中國四國西近畿地方の方言分布圖にそのことが見られる）。次に九州にあつては筑前の西部南部、之に連る筑後の北部、並びに豊後及び日向延岡に「アサ」型式が現はれてゐるが、豊後の如きはこれ亦皆て類例を見なかつた所である。彼此相伴はせて考へれば、山陰地方の性質が那邊に存するかを察知せしめるであらう。兎もあれこれは、北陰の特殊性の所由の問題に對して一石を投ずるものと言へる。

南東は「アサ」の地方と觀るべきであるが、中に「アサー」が讃岐中部・近江西北・京都西方の二郡に夫々存し、「アサー」型式も亦獨り紀州の西北部二郡に現はれてゐる。（出雲姦川郡も亦「アサー」を有してゐる）。本來南東地方の特色の如くに見えた「〇〇」型式は、宛ら特殊の事象として伊豫の喜多・東字和の二郡（佐多岬の根郡）並びに近江湖東の二郡より伊勢・志摩・紀州東半にかけての近畿東傍に細く縦長く分布してゐるのである。而して「アサ」は僅かに土佐中部の吾川郡に見出されるのみである。「アサ」の大勢に押されたものであらう。以上によつて「アサ」の分布様相の全體を大體すれば、容易に理由を推知し得ざる状態に達着する。たゞ伊勢方面は、近畿の中にあつても屢々特殊の事情を暗示することが少くなかつたが、本圖に於いてはそれが明瞭にされてゐるとも見られる。東紀の事情もこれと關聯がある。

「麻」の特例は暫く措くとすれば、本項の四例は大體一言節語低型の場合の語例と共通なものに富む。而も尙、圖と

しては、これらの方が型式分布上一段と純一性が強く、随つて、一音節語に於ける高型の語例に對する低型の語例の隔りよりも、二音節語の「○○」の語例の、「○○」の語例に對する隔りの方が比較的小なのである。尙本調査地方にあつては東京語の「○○」の語例は同「下中」の語例と共に考ふべきものであり、随つて第二項の語例に關する型式上の事は第三項のものと同合して述べることにする。

扱て第三項の三圖であるが、

凡そ東京語とは別個に考へる時、本調査地方のアクセントに對しては二段觀を以て臨むのが最も端的に實體に觸れ得るものゝやうである。さうしてこの見地にあつては、東京語で「下中」のアクセントとせられてゐるものも猶「低高」の如きものとすべきが如くであり、即ち當地方にあつては東京語の「○○」も「下中」もすべて「低高」として二應は一括し得るのに近いのである。然しこれを以て直ちに兩者の本質的な一致を肯定することは未だ困難のやうであつて、兩者は語質の上でかなり明かに何等かの相違も有してゐる。かゝる、聽覺に訴へれば大體「低高」觀が得られるにも拘らず一方語質としては、所謂「下中」の語例は「○○」型式のものとは違に同一視し難いと言ふ背反的な事實は、何よりも先づ分布によつて之を知り得る。

今この三圖を通觀するのに、前の三圖とは二つの點に於いて大いに異なることが分るのである。その一つは北西中心の「○○」型式が南東に相當多く見出されるに至つたことであり、その二つは南東地方の代表的型式として「○○」型式が新たに廣く分布し、北西に對しての逆型式たる「○○」は、南東よりも却つて北西地方の内部に存して所謂特殊

地域を構成してゐることである。^{註一}而もこの二つの事實は同時に相關聯して生起したのである。「○○」が南東にまで廣く分布しようとする傾向のある時、「○○」も亦一方に生じたのである。

註一「○○」が北西に存することは、前にも述べた如く、北西特殊地域の南東性とも言ふべき性質の深遠さを窺はしめるやうである。

註二 隠岐の特殊性すら、この三例にあつては完全に失はれ、中國地方と同様「○○」を示してゐるのは、右の如き分布變動の目安を示すものとも解されるであらう。

二點に於ける異變に伴ひ地方的には又重要な分布變革が示された。北西中心の型式が南東にも漸次多く發見されるに及んでは、遂に四國西南部より北半にかけての共通色が現はれ、必ずしも西南部のみが特立するものでないことがよく示されるに至つたのである。四國北半の、南半二國に對する分立の中に於いても、伊豫と讃岐とは性質上若干の差異がある。即ち所現の型式の種々相に徴すれば、伊豫は北西との共通性強く、讃岐は又例の廷音化現象によつてなほ反北西的な要素を強く示してゐるのである。さうしてかくの如き四國の複雑した状態は、一音節語低型の後三例の場合に全く相通するのである。次に近畿に於いても亦、北方より東傍巾廣い地帯にかけ更には南方にまでも、北西と共通の色調(○○)が見えて居るのであつて、これは一音節語低型の後三例に於いて北西のものが近畿北半方面に分布したのと關聯し、注意すべき傾向と目される。

註「麻」の圖に「アサ」が近畿東傍より南方にかけて見えるのも一面これと通ずる所があると思はれる。

之を要するに東京語の下中型の語例にあつては、本調査地方の分布に於いて、確かに「下上」のもの以上に複雑した内容が現れてゐると言つてよい。このことは「下中」の語質そのものに關聯してゐるであらう。一般に東京語で「下中」とせられてゐるものは、當地方に於いても、明確な「○○」のものとは何等かの質的差異を含んでゐるかに思へるのである。今試みに神保常深兩氏の「國語發音アクセント辭典」によつて檢すれば、二音節語例(名詞)に於いて、一般に、

一、下上型の語に助詞「が」等をつけて當地方で發音した場合は……：「○○カ」

二、下中型の語に助詞「が」等をつけて當地方で發音した場合は……：「○○カ」

の結果が得られるのである。東京語「下上」「下中」の當地方に於けるかゝる對應關係は、當地方に於ても尙、東京語の兩種語例を全然同一視すべきではないことを物語るやうである。加ふるに「○○カ」の場合に至つては、そのアクセント内の音高差度は明確な「下・上」關係よりも稍と尠く、即ち「下中中」程度のものにさへ聽かれるのである。

「○○カ」の方は、最後に強い上昇を來す一般の傾向に支配され、明かに「下下上」である。

東京語に於けるかゝる統計的な結果と、當方分布相に於ける第二項と第三項との右の相違とは、必ずや相應するものでなくてはならない。我々は寧ろ分布相の全體觀を以ての、各語例に於ける相互比較によつて、一層適確な語質(或は語のアクセント質)の検討がなされ得るかと思ふものである。

「麻」の圖の特異な、二音節語例としては全く獨自の、むしろ混亂した様な分布も亦、勢ひその「麻」と言ふ語のアクセント質を

問題にさせないではおかぬが、果してこれも、東京語でこそ下上型に發音されてゐるけれど、當方にあつては、「下—上」の関係か「下—中」の関係かは別として、兎も角東京語の「下中」の語例と略々同様の發音がなされてゐるのである。

再び單音節語低型の場合に戻つて考へると、右の意味に於いては、單音節語低型の六例が前後の三例に分たれ、而もその間に、宛も二音節語の「下上」の語例と「下中」の語例との間に見ると殆んど同様式の相違が見られるのは、忽忽に出来ないことである。我々はこれを以て、單音節語低型とせられるものを改めて吟味する必要に逼られるであらう。私は或は東京語の單音節語も決して東京語三段觀の埒外に置かるべきものでなく、やはり「中」と「上」との見さかひがこゝにも施されるべきなのではないかと考へさせられる。尠くともその見地に立つて觀る方が、態度としては一貫されるのであり、且つ二音節以上の語のアクセントがその語の音節内部に於いて決定せられるのに對し單音節語のものは別に助詞などを加へてこゝに二音節語的なものをつくり二音節以上の語のアクセント決定法に準ぜしめると言ふこと、そのことに籠る若干の撞着を幾分でも軟らげるものかと思ふのである。

扱てこゝに「○○」(第二項)、「下中」(第三項)の語例を一括して型式についてのことを述べよう。これらが等しく、低高觀によつて處理される所に本調査地方アクセントの特異性の一端は見出される。總べて八例、この間に現はれた型式種別としては、北西一般は「○○」南東は「○○」或は「○○」であが、これらに隨伴して生起する型式として「○○」「○○」「○○」「○○」二音節語の延音化したものの諸型式を見たのである。

二音節語の最後の母音が著しく延ばされることは、第一項下降型の語例中にもあつたことであるが、特にこの場合は所に「○○」

「○○○」の二型式をばいゝる。

これらは音節数よりすれば三音節語に属せしめられるべきであるかの如くであるが、延音化現象を持たない單純な三音節語とは、音節語としての理論的性質のみならず、實際の發音上にも尙、徑庭があるから、依然二音節語として看るのを妥當とする。絃上の諸型式を東京語のと比較するのに、北西一般が東京語の型式のまゝである外は、悉く地方獨自のものであり、特に「○○」及び三音化したものは東京語に全然見出し得ないものである。

註「雲」だけは例外に屬するが、これは寧ろ「均整」も「雲」も共に「クモ」である東京語自體の方へ疑問を投げかけるべきものであらう。

X X X X X X

二音節名詞三種の項目の語例に就いての觀察の結果を綜合するのに、こゝに於ける分布の様相は、一音節語に於いて示された一般及び特殊の各傾向を一層鮮明にし、かゝる傾向が實に本調査地方の根本的特質をなすものであることを相當強く示す様である。換言すれば、これによつて、かゝる分布様式を顯現する根源の勢因即ち見えざる地方的基質の牢固たる存在の仕方を愈々確認し得たかと思ふのである。絃上の觀察の誤りでないことは、既に爾餘の分布圖によつて證明されてゐる。随つて、二音節名詞の分布様式は、全分布圖の典型的なものとしての地位を有する、と言つても強ち過言ではない。即ち調製の全分布圖より眺めて、これは極めて一般的な分布様式なのである。それ又根底的な分布とも言へよう。尤もその中であつて、東京語の「下中」の語例の分布は、特別の注意を要するものであつた。

即ちこの種のもの分布は、それ以外のによつて明瞭な、二大對立と言ふ一般基底分布に比し、一層よく分布の成立史的意義を露示するのを以て秀れてゐると思ふ。さうしてかゝる事例に徴するとき、東京語に於いて「下中」の類を立てることの必然性が當方の分布の上からも肯定出来ることは勿論、又當地方としても、二段觀によることが出來て、「下上」「下中」は上昇型として總括し之を下降型に對照させて觀ることが出来るとは言へ、其處に「下上」「下中」兩者に對する何等かの差別ある觀點も設けられねばならぬことが、要請せられるのである。

扱て北西と南東との對立分布の下にあつて、一音節語の場合と共通の特殊地域を除き、新たに特殊地域としての性質を認めるべきものには、先づ四國の東北部がある。之に次いで特殊性の濃厚であつたのは四國北半として、其中に於いて伊豫は又一箇の特殊性を有する。近畿に於ける北部及び東傍の地帯更に南部の北西的色彩の現はれも含蓄する所が極めて深い。大和十津川地方アクセントについて今日まで言はれてきた異種アクセントの孤立的分布と言ふ考へ方は、ここに訂正せられるべく、所詮はこれも、近畿東傍より南部へかけての、何らかの程度に於ける反近畿的傾向の一端であつたのである。たゞ此處に特に強く反近畿色の認められるのは異とするに足る。近畿東傍の反近畿色は中部地方(北陸道を先づ除く)のアクセントと、近畿北部の反近畿色は但馬と共に丹後の北半をかなり恒常的に覆ふ北西色(一般的に言へばこの境界線は語例に應じて時に出入がある)と、夫々聯關させて考へることが出來よう。それにして一部近畿北方より北陸道にかけて依然近畿的アクセントの續くことは別の脈絡として注意されねばなら

近畿と中國とのアクセントに於ける接境状態は、山陰側はかなり明かに播磨の西境を以て境せられるからさしたる問題はない（細部に至つては色々のことがあつて、文字通り國の境をアクセントの境とはし難い節もあること、昭和九年三月の踏査によつて明かにされたのであるが、それらは今の場合殆んど問題とすべきほどのものではない）が、山陰側はかなり複雑してゐるのである。大體は前記の如く但馬と丹後北半とが中國一般と同傾向であることは、その間の事情を明かにせんとして行つた昭和十年夏の踏査によつて知られるが、その際も現はれた如く、時にはこれらの全體に近畿と同一傾向の現はれることもあるのである。それかと思ふと、この地方はもとより播磨の西部及び北方、丹波北方にまで北西色が見られることもある。かゝる境界可動性の根底には、近畿北方に廣く現はれんとすることもある前述の北西色との脈絡が存するであらう。随つて又但馬一國及び丹後北半の北西色が恒常的に明確に現れたとしても、それを單に中國地方の影響の結果に基づくものとしてのみ簡單に片附けるわけにはゆかない次第である。かくては近畿北部に發見し得る北西色のこの廣い領域には、近畿アクセント生成の過程中に棹す所の何等かの要因を認めねばならないことになるであらう。近畿東傍及び南部の北西色の存在にしても同様のことを考へさせるもの様である。即ちこれが、假令中部地方との現代的な交渉の結果に基づく所はあつたとしても、それは主として近江湖東及び伊勢東北部等に對し最も適切に言ひ得ることであつて、南紀南和、之に隣る南勢等に見える北西色に至つては、根底の深い歴史的過程の断面或は末端と思はれるのである。反面、近畿色が東北の北陸道を傳つて延びてゐることも、亦當地方に於ける近畿アクセントの生成過程に於

いて、特別な事情が働いて、この方だけは特にさうなるに至つたものと観ることが出来る。

一音節語に於けると同様に二音節語に於いて特殊地域として現はれた所々は、その特殊性が一層顯著に示され、且つその周邊に手掛りとなる中間的な型式が見えて、何れも幾らか宛の解決手段を分布上に發見し得ることゝなつた。二音節語の場合に於ける特殊地域の現はれ方が、一音節語の場合と、提示語の型式性の對應に順つて、相應じてゐるのも注目される。

下降上昇兩傾向のものを互に比較するのに、上昇傾向の語例に於いて一層複雑した分布が現はれることは、尙一音節語の場合に一致する。南東地方特有の諸型式は、この上昇傾向の、而も分布様式上、下降型の語例との懸隔が甚だしいもの（即ち東京語の下中型の語例）に於いて、盛んに現はれるのである。この點は最も強く我々の關心を惹く。さうして、アクセントに於いても類推作用があり得るから、このため等により、少しづつは、下降型の語例との分布上の懸隔の殆んどない語例（即ち東京語の下上型のもの）の中にさへ右に述べた南東の特徴は見出されるのである。

「**OO**」又は「**OO**」は、單に存在型式としては、北西南東及び東京語にすべて見出される所のものである。然しそれが語アクセントとして生かされてゐるものに就いては、北西地方は、東京語と同じ型式をとり（例外、「雲」）而して下降上昇兩傾向の語例を通じて、南東地方とは多く逆型式の對立をなすことに略と一定の規則性を有する次第であ

る。一應は大體かう言つてもよい。随つて自己の周邊と多く正反對の型式を示す特殊地域は、自己の住する地方と對位の地位にある反對側の地方の一般型式に相通する。

一般に二音節語に於いて生じ得る一切の型式と言へば、「○○」「○○」「○○」「○○」の四種を出でない。本調査地方に於いては「○○」は大體認め難いが、東京語に全然存在しない「○○」の大小多様の分布を、南東及びそれと同傾向の北西内特殊地域に見ることは特筆すべき事項である。この種の全高型式に就いては、既に前にも觸れて來たのであるが、此處に一應發生的考察を試みることにしよう。「雲」の圖に於いて讀岐を觀るのに、東から西へ順次に

大川郡クモ(東隅にクモ)

木田郡クモ

香川郡クモ

綾歌郡クモ

中多度郡クモ

三豊郡クモ

の如く各種の型式が分布してゐる。此處に「クモ」型式が、「クモ」と「クモ」及び「クモ」の間に介在してゐることは、その「○○」型式發生の過程を推考せしめるものではあるまいか。「クモ」は「クモ」の型式を主體とするものであるから、「○○」に還元して考察すると、もと／＼北西の「○○」に對して南東に「○○」を生ぜんと

して成らず、遂に中間的型式として「○○」を發生せしめたのではないかと思ふ。一體明確な上昇型即ち「○○」の語例に於いては、

北西 ○○↑○○ 南東

の如く對立してゐる。隨つてこの點に關しては南東としては下降型式をとらんとする傾向が内面に、相當根強く存在するものと考へてよい。所が「○○」の分布の盛んなものにあつても尙且、僅か乍ら「○○」を混在せしめてゐるのであり、南東と聯關する九州の特殊地域に至つては、完全に「○○」のみを分布させてゐるのが普通なのである。

これによつて觀れば、「○○」に對して、或る基質の働きにより「○○」型式をとらんとして、その傾向は冒頭にとゞまつて進行せず、その高音は本質的に弱勢となり、遂に第二音節と平均するに至つたものではあるまいかと思ふ。

「○○」のアクセントの高度は「○○」の高音部よりも半音近く下つたかと感ぜられる程に低まつて聞えるのが常なのであり、且つその發音は鈍角的でテンポも他に比して稍々遅く、この中に著しく女性的な音調を蔽してゐると觀られるのも、故ないことではないと思はれる。此の新たな成型には、北西に略々遡在する「○○」型式が、南東地方にも相當多く現はれてゐることも關係してゐるかも知れない。例へば餘(第三項の語例)を「アメ」と發音する土佐の吾川郡では、「柿」(第三項の語例)を「カキ」と發音せんとしても先の「○○」型式を同時に同所に有してゐるのであるから、勢ひその類推をも惹起し、カキのキは比較的容易に、高めに發音され勝ちのところもあるかと思ふ。即ち「○○」型式をとらんとしてその傾向が進行せんとする際にそれを防遏するものは、同時に同所に存在する所の、「○○」

型式の語例の影響か、又は具體的な語例が直接同所に存せずとも、全地方人士の、「○○」型式の發音體驗に基づく所の類推作用とも見られる點があるかも知れないと思ふ。敢て上昇傾向の語例中に於ける南東の「○○」分布そのものからの影響ではなくても、或は下降型の語例に於いて南東が恒常的に示す「○○」型式の類化もあるかも知れない。發音體驗と言へば廣く之をも含む。更に想像を逞しくすれば、「○○」型式の分布の間に混在する「○○」に限つては、最初からこの型式をとつて現はれたものではなく、「○○」が更に程度を進め、換言すれば、北西に正反對の「カキ」とならんとする傾向を全然亡失すると共に、發音の壓力が語尾に來ることに煩はされて尾高型式となつたと見ることも出来るやうである。それにしても變化の過程に於いて、別の「○○」又はその發音體驗の影響をうけないではすまなかつたであらう。

一通りは上述の如く考察されるが、尙、半面に分布の系統に關する知見から確かめられなければならない。一體、九州の特殊地域は、系統上南東地方と軌を一にすることが多い。この間に何か同質の底脈があるらしいことは、全部の分布圖上によく想見せられる。然る時、北西一般が「○○」なる圖例に於いて、九州内特殊地域には「○○」、南東地方には大部分「○○」が存し、さうして稀に南東に「○○」が點在すると言ふ事實からは、上述の如き型式の考察と併せて、「○○」は「○○」よりも新生の第二次的型式であると推論することが出来るのではなからうか。

扱てこの見地に立てば、「○○」型式はアクセント分布の系統探究に重大な役割をなすものであることを、逆に言ひ得るのである。アクセントの全高型は、音節數の如何を問はず、すべて南東地方獨自（北西に於ける極めて特殊の

場合を除き)の特徴であることが、全部の分布圖の上から知られるのであるが、アクセント型式種別とその分布との關係を系統的に追求せんとする際には、かゝる全高型が一大視點とされる。變化によつて生じた後生の型式であること
の明かな「○○○」「○○○」「○○○」「○○○」及び「○○」に對する「○○○」の各々(二音節語の三音節化したもの)は、
分布の系統的考察に對して一層有力確實な資料となるものであることは、右の場合に徴して多言を要しない。而もこ
れらの諸型式は、「○○」と共に、南東地方獨自の特徴として見出されるものであるから、結局本調査地方アクセント
の分布と型式の研究に於いては、問題解決の手順上、北西よりも南東の方が一層重要な地位に立つてゐるものと認め
ることが出来るのである。

註 出雲簸川郡の一部では、二音節語の最後の母音を引延ばして、三音節らしく發音するのを聴いたが、結局孤存の例外であると
思はれる。萬一この方がかなりあるとしても、當地方がよく南東一様と同調を示すことから、それは却て興味深い事實と
されよう。

(この項終り)